

四日市大学 ピックアップ・トピックス

2010年4月1日発行 vol.9

【発行】四日市大学 入試広報室

〒512-8512

三重県四日市市萱生町 1200

電話 059-365-6711

FAX 059-365-6630

URL <http://www.yokkaichi-u.ac.jp/>

E-mail nyushi@yokkaichi-u.ac.jp

<ul style="list-style-type: none"> ・伊勢竹鶏物語 3R プロジェクト ～成果発表会・NHK 取材～ ・数学史シンポジウム ～関孝和数学研究所～ 	P.1	<ul style="list-style-type: none"> ・新バイオープ造成 ・四日市学シンポジウム 2010 ・四日市大学教学フォーラム 	P.3
<ul style="list-style-type: none"> ・山に木を植えよう ～生物多様性イベント～ ・「生命のメッセージ展 in みえ」 ・「森が消えれば海も死ぬ」第2版出版 	P.2	<ul style="list-style-type: none"> ・「みえ生涯学習ネットワーク」 ・ESL 合宿 ・卒業生～温泉熱を利用しイチゴ栽培～ 	P.4

伊勢竹鶏物語 3R プロジェクト ～成果発表会・NHK 取材～

2010年1月30日、四日市商工会議所ホールで伊勢竹鶏3Rプロジェクトの成果発表会が行われた。本プロジェクトは環境省の2009年度「循環型社会地域支援事業」を四日市大学エネルギー環境教育研究会が受託したもの。内容は、間伐した竹を微粉碎し特殊な細菌群（アライ菌）を混ぜ発酵させたものと、食品加工場で発生する未利用資源（パン屑や野菜屑）を飼料の半分として使用。竹の成分とアライ菌群の働きにより、鶏卵や鶏肉の高品質化の達成と、排出される糞臭の削減をねらう。また糞は発酵処理後に堆肥として有機野菜作りに利用され資源循環を達成するというもの。

発表会は、松井真理子教授（総合政策学部）の基調講演「市民がつなぐ循環型社会」、岡良浩准教授（経済学部）の特別講演「地域循環ビジネス創造」に続き、研究メンバーである岩本淳子准教授（四日市看護医療大学）の「卵の栄養価と細菌の分析結果」の報告があった。また、養鶏場会社から「卵の品質に関する分析結果」が報告され、産卵後1週間程度経過しても鮮度の低下が少ないとの評価が示された。また、老舗観光旅館からは、卵と肉の付加価値は極めて高く、安定供給されるならば、是非使用してみたいとの意見も出た。

最後に、本事業を卒業研究として取り組んできた田代慶光さん（環境情報学部4年）がビジネス化する場合のケーススタディーについて報告した。会場からは田代さんと、同じく養鶏を行ってきた渡辺一央さん（環境情報学部4年）両名にねぎらいの拍手が送られた。

また、この取り組みについては、「まるごと四日市地域ブランド」に認定され、3月9日にはNHKの「おはよう東海」でこの事業の取り組みについて放送された。



数学史シンポジウム ～関孝和数学研究所～

2010年3月13日（土）、14日（日）の二日間、名古屋市東区の名古屋市市政資料館で「3.14...関孝和数学研究所シンポジウム」が開催された。3月14日を選んだのは、円周率にちなんでのこと。今回は東洋数学史に関する特集で、13日は「数学史入門講座」、14日は「関流数学研究の先端」が紹介された。初日の講演者は関孝和数学研究所所長の上野健爾氏（京都大学名誉教授）、副所長の小川東教授（環境情報学部）、二日目は関孝和数学研究所客員研究員の小林龍彦氏（前橋工科大学教授）、佐藤賢一氏（電気通信大学准教授）。参加者は高等学校の教員をはじめとして、大学院生、大学の教員、一般の方まで幅広い層に渡った。

山に木を植えよう

～生物多様性イベント～

2010年3月14日、四日市大学自然環境教育研究会主催の生物多様性イベント「山に木を植えよう」が早春の朝明溪谷で実施された。この企画は本年9月に名古屋で開催される生物多様性条約締結国会議COP10のパートナーシップ事業として認定されている。朝明溪谷上流の伊勢谷（標高約550m）は2008年9月のゲリラ豪雨で大きな被害を受け、針葉樹の人工林斜面などが崩落した。この斜面に強い根を張る広葉樹の苗木を植えて、森林を再生させようというのが研究会の狙い。この植樹イベントへの関心は高く、地域のボーイスカウトの子供たちや親子連れの方々など、約250名の参加者が集まった。最初に、研究会会長の新田義孝教授（環境情報学部）から「山と心に木を植えましょう」と挨拶。参加者の皆さんは、研究会スタッフから苗木を受け取り、苗木種類に応じて設定された斜面の区画で30cm程度の穴をスコップで掘り、腐葉土を底に敷き、苗木を置き、土を埋め戻した。さらに、添え木を打ち込み、木製の名札を作成して苗木に結び、ペットボトル1本分の朝明川の水を注いで植樹を行った。木製の名札に日付や樹種とともに自分の名前やメッセージなどを書き込み、記念とし、全部で約350本の苗が斜面にしっかりと植え付けられた。

共催団体：高松干潟を守ろう会、菰野緑の少年隊、三泗自然に親しむ会

植栽樹種：コナラ、ミズナラ、アカシデ、イヌシデ、スダジイ、ウリハダカエデ、ウリカエデ、イロハモミジ、コシアブラ、アカガシ、アラカシ、コブシ、タニウツギ、ノリウツギ、クロモジ、シロモジ、ヤマハンノキ、コバノミツバツツジ、ムラサキシキブなど



「生命のメッセージ展 in みえ」

2010年3月7日に開催された「生命のメッセージ展 in みえ」で、本学学生がその実行委員会にボランティアとして準備作業などに参加した。これはNPO法人「いのちのミュージアム」が主催するもので、犯罪被害者への支援を目的として全国各地で開催されている。大学の枠をこえて大学生たちが生命の大切さを訴えている。活動に参加したのは県内6大学からの学生で、本学からの参加者は村田明浩さんと岩谷貴章さん（ともに総合政策学科3年）の2名。企画会議の段階から参加し、市内でのチラシ配布や広報活動、会場設営や当日の来場者説明などを行った。参加した村田さんは、「生命は、特別なもので代わりがきくものでも、再生できるものでもない。無くしてからでは遅いのです。この機会に自分の考え方を改めていくとともに、多くの人の心に生命のメッセージを届けていければと考えています。」と語った。

「森が消えれば海も死ぬ」第2版出版

松永勝彦教授（環境情報学部・北海道大学名誉教授）が、新書版「森が消えれば海も死ぬ」の第2版（講談社、188ページ）を出版した。陸と海を結ぶ生態学を基に、最近の事例を紹介しながら森の重要性をわかりやすく紹介している。松永教授は93年に初版を発刊している。（松永教授は、森林が河川、海の生物に果たす役割に関する研究により、第1回環境水俣賞、日本海水学会賞、日本分析学会功労賞などを受賞している。）

第2版では、地球温暖化を遅らせる有効な手段として、間伐材をバイオマスエネルギーとして利用することを提唱、日本人1人あたりの二酸化炭素の排出量、年間約10トン。それを生涯1,000本の植樹をすれば100歳まで生きた人も自分の排出した二酸化炭素を消滅させた計算になる。」としている。

松永教授は、このほかにも2月にはテレビ朝日系全国ネット「たけしの健康エンターテインメント！みんなの家庭の医学」でコメンテーターとしても登場。また、日本テレビ「破壊される海」にも出演された。

新ビオトープ造成

環境問題に取り組んでいる学生で組織する「四日大エコ活動」が、2010年2月18日に2代目となるビオトープを造成しはじめた。同じ学園の四日市看護医療大学の学生を含む15名が、長靴を履いて、スコップや鍬を使い、遊水池に5m×3mほどの長方形の池を掘った。また、遊水池の流水口から池までの水路も掘った。今後は、在来種のメダカやカメなどを導入する予定。生物相が豊かになったら、地域の小学生を呼び環境教育の場を提供し、大学のセミナー活動で水質や底質の分析を行う予定。四日大エコ活動では、これまでにエコキャップ集めや、植物で緑のカーテン作りなど積極的に活動している。代表の村井丈人さん（環境情報学部3年）は「さらに整備を進めるので、完成の予定はわからない。鳥が羽を休めるような池になってほしい。」と話した。



四日市学シンポジウム 2010

2010年1月13日、四日市大学の教員らで組織する「四日市学研究会」が、三重県北勢地域の中小ものづくり産業の活性化を考える「四日市学シンポジウム」を開催した。当日、講演をつとめた河崎亜洲夫教授（経済学部）が「東京都大田区や大阪府東大阪市など、産業集積地と変わらない分業構造がこの四日市にはある」と指摘。今後も企業や大学、研究所などの連携の強化、行政などを通して「北勢地域中小機械金属産業のクラスター化への課題」について講演。北勢地域は日本のものづくりを支える金型や鋳物など機械金属産業が多くあり、今後も技術力、マーケティング力をさらに強化していき、活発な経済活動を展開し、地域振興策として注目を集めている「クラスター化」が重要とした。また、三重北勢地域地場産業振興センター職員の西浦尚夫さんが、「地場産業の過去・現在・未来について」と題して地場産業の成り立ちや歴史に触れながら、講演した。

当日は、学生や企業の経営者、行政やシンクタンクの方など約100名が参加し、耳を傾けていた。



四日市大学教学フォーラム

2010年3月3日、四日市大学全学FD委員会主催の「教学フォーラム」が開催された。岩崎恭典全学FD委員長（総合政策学部教授）は、全学での取り組みを報告し、中教審の「学士課程教育の充実化方策について」などで方向付けられている大学政策について、それを履行しつつ本学独自の教育を創っていくことが課題だと訴えた。各学部からは、学科ごとの授業改革の取り組みや、今後の課題など報告があった。続いて、後半では環境情報学部から体験型授業の取り組みを取り上げ、新入生オリエンテーションを含む初年次教育の内容について紹介され、自発性やコミュニケーションのきっかけを創っていることが紹介された。また、産業廃棄物の不法投棄現場の見学、三重大学の練習船での洋上実習、オーストラリア・クイーンズランドでの海外環境研修について報告があり、こうした機会をひとつのイベントに終わらせないためには、どうすべきかなどの課題が提起された。また、各学部の取り組みが報告され、全学的に、今後の大学教員の教育能力を高めるための実践的方法を共有できたと思われる。今後も、引き続き積極的に活動を展開していく予定。

「みえ生涯学習ネットワーク」

2010年2月21日に、三重県生涯学習センターの主催により「みえ生涯学習ネットワーク交流会」が実施され、本学の学生がこれに参画した。参加学生を中心となったのは岩谷貴章さん(総合政策学科3年)で、1年ほど前から同交流会のメンバーとして企画を考え、当日まで準備に奔走した。

「留学生との交流」をテーマに、三重大学、鈴鹿国際大学からもメンバーを募り、地域住民と留学生とが交流できる企画を検討。当日は、伊勢型紙、塗り絵などを来場者が楽しみながら、世界のお菓子を味わったり、クイズをしたりして、実際に留学生と話してもらえる企画を実施し、全体で270人の来場者があった。また、シンポジウム「子育て、人育て、自分育ちから考える地域『学』」に、岩谷さんはパネリストとして参加。会場からの質問にも答え、「地域のイベントに参加したい学生は、自分から熱心に参加し、参加しない学生は誘ってもなかなか興味を示さない。最近の学生は両極端な学生が多い。」など、意見を述べた。



ESL(English Support Lounge)合宿

2010年3月8日から10日までの2泊3日で、ESL英語合宿が開催された。すでに恒例となっているこの合宿に、本学と四日市看護医療大学からの参加があり、ネイティブ教員3名が引率した。志摩市大王町の豊かな自然環境の中で3日間にわたり、コテージで自炊しながら英語だけの生活を楽しんだ。

今年は残念ながら天候に恵まれず、特に2日目は嵐。屋内で、カードゲームなどのアクティビティを行った。ゲームの中では繰り返し使う言葉が多いためか、最初はとまどいがちだった参加者も最後には自然に英語が口をつくようになり、楽しそうに過ごしていた。夜はチームに分かれてアクティビティを考えるなど、グループワークも盛り上がった。夕食のメニューは、「日本の食卓には見かけないアメリカの食事を」と、アメリカ人教員の指導で調理した「スプリット豆のスープ」。最終日はやっと青空を垣間見ることができ、参加者全員で自然散策。大自然の中で植物の名前や浜辺の生物などの名称を英語で教わりながら、散策を楽しんだ。参加者からは、「間違いをすぐに指摘してもらえるので、わかりやすい」「生活の中で、英語独特の表現が学べる」と大変好評で、「来年も参加したい」という声が相次いだ。



卒業生～温泉熱を利用しイチゴ栽培～

平成21年度に環境情報学部を卒業した内田潤さん(片岡ファーム取締役)が、温泉熱を利用した有機肥料・減農薬栽培のイチゴ農園を菰野町にオープンさせた。暖房用燃料の重油使用量を3割減らせるため環境に優しく、しかも有機肥料を使用し時間をかけ育てているため、味も濃厚でさらに糖度も最高17度と高い。マスコミでも多数取り上げられている。片岡ファームは、天然温泉の「片岡温泉」が昨年9月に始めた、広さ270平方メートルの農園。土の中に入れた管に43.6度の源泉を流し、暖房用燃料と併用して地温10度以上に保っている。イチゴの種類としては、「紅ほっぺ」と「章姫」。栽培されたイチゴは、農園での直売のほか、温泉施設の売店、近くの「道の駅菰野ふるさと館」で販売されている。

※ 今までに発行された Pick Up Topics が、ホームページからご覧いただけます
<http://www.yokkaichi-u.ac.jp/guidance/09.html>

又は 四日市大学トップ→大学案内→ピックアップ・トピックス